令和4年度 学校評価自己評価表（中間）

学校教育目標	学校教育目標　自ら学び，考え，行動ができる「きさ」の子どもの育成
重点目標	心と志（自立と貢献）を育てる学校

学校関係者評価委員（評価）
A：100≦（目標達成）　B：80≦（ほぼ達成）＜100
C：60≦（もう少し）＜80　D：（できていない）＜60

評価計画					自己評価					学校関係者評価委員	
経営目標			評価指標	具体的な取組・方策	8月			分析（成果と課題）	改善方策	評価	記述（成果・課題）
	中期	短期			達成値	達成度	評価				
生きる力の育成	確かな学力を育成する	学習規律を定着させる。 主体的・深い学びの充実を図る。	・学習規律が身に付いた児童を90%以上にする。 ・自分の考えを伝え合い，考えを広げたり深めたりしているという児童の割合を60%以上にする。	・「ベル着」「次の学習準備をする」「号令前後の静止」の徹底を図る。（強化週間を設け，児童会とも連携しながら意識付ける。） ・学習を通した学びの深まり（初めの考えと学習後の考えの変化・友達の考えを聞いて広がったり深まったりした考えなど）を振り返る取り組みを進める。	80% 66%	88 110	B B	・時計を見て行動するなどの声かけや振り返りカードを活用することで，意識するようになった。次の授業の準備に課題がある。教室移動がある授業のベル着の徹底が難しい。 ・振り返りの内容を具体的に示し，自分の学びを振り返るようにした。わかったことの振り返りはできるが，学習前後の考えの変化や友達の考えを聞いての変化まで振り返ることができていない。自分の考えを言葉にして言い表せない児童が多い。振り返りの時間を十分に確保できなかった。	・授業終わりの号令の際に，「次は〇〇です。準備をしてから休憩しましょう。」と言うことで，意識して準備に取り掛かれるようにする。こまめに評価や振り返りを行う。教室移動があるときには，児童・指導者どちらも意識して授業開始に間に合うように取り組む。 ・授業の始めの見通しや予想を立てる時間と振り返りの時間を確保する。振り返りの内容について具体的に指導する。（※児童の発達段階に応じた指導）	A A A A	・児童は一人一人その人らしく授業に向き合う姿ができていると思う。 ・昨年度に比べ，児童会と連携したり，振り返りを重視したりするなど，児童の主体性を生かした取組・方策となっている。分析も適切になされ，改善策も具体性のある内容になっている。下半期の取組を期待します。 ・課題をわかりやすい言葉で分析されています。 ・児童は落ち着いた様子で，服装や言葉遣いも問題は見られなかった。わからないことに対して，「わからない」と言っている児童がおり，自分の意見や考えを発信できていた。自分とは異なる意見に対しても認め合えていたと思う。
		学力を確実に定着させる。	①国語科・算数科の単元テストで，80点以上の児童の割合を各学年85%以上にする。 ②三次市学力到達度検査（基礎・活用）で，全国平均を上回った教科数の割合を80%以上にする。	・各教科の特性を生かした指導を工夫改善し，児童の「わかる・できる」を保障する。 ・ドリルタイムを機能的に活用し，基礎的な技能の習得や復習を図る。 ・自主学習ノートで予習，復習に取り組み，基礎学力の定着を図る。	①73%	①85	B	・家庭学習やドリルタイムで計算や漢字練習を繰り返し行い，力が定着した。思考力・判断力・表現力や，活用問題に課題が見られる。	・ドリルタイムを活用し，数多くの読み取り問題や算数の活用問題に取り組む。また，それぞれのポイントを取り上げながら読み取り方や問題への取り組み方のポイントをおさえる。	B B A	・手厚い指導が行き届き，学力が身に付いている様子が分かった。 ・昨年度末の改善方策が「自学自習ノート」への取組として生かされている。 ・基礎基本の定着と主体的な学びの両立に努めてほしい。この部分について，高等学校でも悩みながら取り組んでいる。 ・基礎の部分を大切に取り組んでいいただきたい。 ・反復学習をすることで力をつけてきているのだと思う。きめ細やかな学習指導を行っておられると思う。
		表現力を育成する。 （小中一貫教育）	・自分の考えを持ち，それを伝えている児童の割合を80%にする。	・児童が考えたいと思う授業づくり（めあて，発問の工夫）を行う。 ・ペア，グループ，一斉学習といろいろな形態で考えを伝える場を設定する。 ・考えを書く時間，学習の振り返りをする時間を確保する。	79.0%	98	B	・ペア学習を積極的に取り入れることで，考えを伝える場を多く設定できた。考えを伝えることが苦手な児童がおり，発表者が固定してしまいがちである。	・引き続き，ペア学習やグループ学習を取り入れ，伝え合う場を設定する。児童が考えて発言したくなるような発問を工夫する。	A A A A	・児童は，それぞれよく自分の思いを表現している。 ・目標を新しくした取組なので，じっくりと評価する必要がある。高等学校でも同様の課題が見られる。校種を越えて吉舎の良さを生かしながら，お互いに取り組んでいきたい。 ・言葉にすることが難しい子は，言葉以外での表現方法があればいいと思う。 ・コロナ禍の中で学習活動にも制限があったと思うが，その中で工夫して学習する機会をつくっていた。
	豊かで健やかな心身を育成する	自己有用感の向上と礼節と規範意識の定着（小中一貫教育）	・自己有用感を持つ児童を80%以上にする。 ・規範意識をもつ児童を85%以上にする。	・自分の良さに気付き，伸ばしいこうとする意欲や友達の良さを認められる児童を育てると共に，認め合い，つながりを深める集団づくりに努める。 ・道徳学習プログラム「吉（よ）き舎（やど）りプログラム」を計画実施し，自分との関わりで考えさせる。 ・あいさつ，はきものそろえ，返事ができる児童を育成する。あいさつの仕方を具体化したものを提示し，委員会活動などで児童が主体的に取り組ませる。 ・アンケートやi－checkを分析し，PDCAサイクルで取り組む。	90% 91%	112 107	A A	・道徳科において自分の良さや自分らしさに気付くとともに友達との違いを認めることの大切さから自己肯定感の向上をさせた。また，「吉き舎りプログラム」では，特別活動と関連させながら，実生活と道徳科の関連を意識させた。 ・委員会が中心になり，全校に目標を示すことで生活規範を意識できた児童が多数いた。しかし，相手を意識してのあいさつや返事はできていない。	・特別活動などとの関連を生かした「吉き舎りプログラム」を計画し，自己肯定感の向上を図る。また，「吉き舎りプログラム」の内容を視覚化することにより，成長や考えの過程を自分のこととして考えさせていく。 ・自治活動を充実させ，他者評価や自己評価する時間を設定して，自己有用感をもたせていく。 ・委員会の活動としてあいさつ運動を行い，児童のあいさつへの意識を高める。	A A A B	・道徳科に力を入れておられ，積み上がりが表れている。挨拶も気持ちが良い。友達との仲間意識も見られる。 ・この取組・方策も委員会活動など児童の主体性と重視している点が評価できる。 ・自己有用感や規範意識が高いのは良い傾向なので，それを生かした教育活動の実践に努めてほしい。 ・委員会活動が活発になされているなと学校だよりでとても伝わっている。 ・あいさつについては全体的に声が小さく，自分から進んでする児童が少ないように感じる。 ・親，大人の人もあいさつができていない方がおられる。子どもだけでなく，親子で取り組む，一緒にがんばるあいさつをしていければと思う。
		体力を向上させる	・新体力テストで，50%以上（昨年度32%）の項目が県平均または全国平均を超えるようにする。 ・食に関心を持ち，食べ物を好き嫌いせずに食べようとする児童を75%以上にする。	・新体力テストの県平均等や昨年度の自己記録をもとに，自己目標を設定させる。 ・体育科を中心に体づくり運動に取組む。 ・給食時間や各教科等の時間を活用して，食に関する指導を行うとともに，掲示やたより等を活用して，食に関する興味・関心を高める。	体力 36.4% 食 91.4%	体力 72 食 121	体力 C 食 A	（体力） ・すべての項目において，県平均値かつ全国平均値より低い学年がみられた。運動を習慣的に行っている児童と行っていない児童において体力差がみられた。他学年との合同体育を通して，意欲的に体力づくりに取り組むことができた。 （食） ・食事の時間が楽しみと答えた児童は約95%と，食への関心の高まりがうかがえた。給食指導を通して，苦手なものでもひと口はチャレンジしたり，量を減らしつつも完食させたりするなどの取組を行うことができた。	（体力） ・体育科の授業の始めに，サーキットトレーニングとして，走・跳の運動を取り入れ，走力の向上を図る。 （食） ・極端な偏食や食事マナーに課題がある児童もいるため，引き続き給食時間や各教科等の時間，参観日等の機会を活用して，食に向き合う時間をつくる。また掲示資料や便り等を活用して，食に対する関心をさらに高める。	A B B B	・運動会や体育科を見せていただき，能力よりも児童が生き生きとしているところが素晴らしいと感じた。 ・体力については，継続した課題となっている。すぐに結果が出るとは限らないので，粘り強く取り組むことが必要。焦らず慌てず長期的な視野に立って考える。 ・食については，達成度が高いので，引き続き取組を進めてほしい。 ・日々の運動の積み重ねがあっても良いのかなと思う。 ・コロナ禍で子どもたちが運動する機会が減っている。ただ単に体の発達に影響が出るだけでなく，人とのコミュニケーションなどの機会も減ることで，社会性の発達などの影響が出てくるのかと心配。家庭でも運動なども学校で取り組んでみてはどうだろうか。
	信頼される学校づくりを行う	地域に信頼され，開かれた学校づくりを推進する。	・小中連携の充実を図り，月に1回以上，学校だよりやホームページ等で保護者や地域に情報提供を行う。保護者アンケートで肯定的な回答の割合を90%以上（昨年度92%）にする。	・「きさ」小中一貫教育推進協議会の計画のもとに，小中9か年を見通しためざす子ども像に向け，連携教育の実施，充実を図る。 ・学校だより，ホームページで小中連携教育の取組を具体的で分かりやすい内容で保護者，地域に情報提供を行う。保護者アンケートを実施し，小中連携教育に関わる保護者等の理解を把握し，取組に生かす。	90.4%	100	A	・学校だより「とみしのさと」や学校ホームページ，学級通信等を通して，保護者や地域に積極的に情報発信を行い，児童の姿を通して学校での教育活動の様子を知らせることにより，約90%の肯定的評価を得ることができた。	・今後は，「きさ」小中一貫教育推進協議会の活動を通して，連携教育の取組をさらに情報発信していく。	A A A A	・学校と地域はしっかりと連携が取れている。保小連携もありがたい。 ・HPをはじめ，保護者や地域への情報発信はよくできています。コミュニティスクールも始まるので，引き続き保護者地域連携を進めてほしい。 ・子どもたちの学校での様子がよく伝わる。 ・学校での子どもの様子などを知る機会が多くあり，安心する。
	働き方改革	教職員の児童に向き合う時間の割合を増やす。	・働き方改革により，児童に向き合う時間の割合が増えた実感を感じる教職員の割合を80%以上（昨年度79%）にする。	・学期ごとのアンケート，メンタルヘルスチェックにより実態を把握し，学校衛生委員会，企画委員会の取組を行う。	80%	100	A	・教職員へのアンケートの結果，教務事務補助員等の人的配置，日課表の見直し，業務のデジタル化等の取組により，児童に向き合う時間がある，またはある程度あると答えた教職員が80%であった。	・今後とも業務改善に係る意見を教職員より広く募るとともに，担当業務の見直しや一斉退校日の取組等を通して，児童に向き合う時間を確保するとともに，時間外勤務時間縮減を図りたい。	A A A A	・先生方の幸せのために働くことが，子どもの幸せにつながるよう取り組んでおられる。 ・授業参観や道徳科の研修会などで，先生方の生き生きとした姿を見ることができた。アンケートの結果から，先生がストレスなく働いていることを推察する。数字に表れる時間外削減についても引き続き取り組んでほしい。 ・先生方みなさんが協力して個々に向き合ってくださっているのがとても伝わる。 ・働き方改革の取組の成果として，全教職員の方が児童に向き合う時間を確保しておられるように思う。精神的にも負担の大きい仕事なので，今後もより改善していただければと思う。

（評価）A：100≦（目標達成）　B：80≦（ほぼ達成）＜100　C：60≦（もう少し）＜80　D：（できていない）＜60